

## 2004 年度前期文献演習学期末課題 B

## - バルザックの『財布』における恋愛論について -

課題 B-1：授業で取り扱えなかった残りの 10 ページを中心にして、テキストに表れる恋愛論について論ぜよ。

バルザック (Honoré de Balzac, 1799-1850) の『財布』 (*La Bourse*, 1832) は将来の成功を約束された若い画家イポリット・シネールと貧しい貴族の家に生まれたアデライド・ド・ルーヴィルの恋の物語である。この物語は二人の出会いから結婚までの過程を主人公イポリットの心理をもとに、恋が始まると同時に生まれる様々な感情とその変化を描いた恋愛論である。ここでは授業で扱うことのできなかつた残り 10 ページを中心にバルザックが考える恋愛と愛情によって生まれる感情を分析する。

『財布』でバルザックは彼自身の恋愛論を展開しているという視点からみると、イポリットとアデライドの恋は主に 5 段階に分けることができる。この 5 段階というのはイポリットとアデライドの間に恋が芽生え、それが結婚によって成就するまでの段階である。大まかな流れとしてはまず二人の間に恋心が芽生えた直後に二人がみせる恥じらいや控えめな態度が会合を重ねるにつれて親しみへと変わっていく。やがて彼らはお互いをなくてはならない存在としてみるようになるが、その気持ちは自分に会いに来なかつたアデライドのイポリットへの嫉妬という新たな側面をみせるようになる。その後アデライドの家でイポリットが財布をなくすという事件が発生し、財布はアデライドによって盗まれ、自分は今まで彼女に騙されていたのではないだろうかと疑う主人公のアデライドに対する愛情は疑いから苦しみへと変化していく。しかし物語の最後では財布が盗まれたという誤解も解け、イポリットはアデライドに結婚を申し込み二人は結ばれる。もっと具体的にはテキストの 233 ページにある二人の出会いと恋の芽生え (第 1 段階) が 239 ページからはより親密な愛情に変わり (第 2 段階)、252 ページからは自分の知らない社交界に出入りするアデライドのイポリットへの嫉妬という新しい感情が生まれている (第 3 段階)。このように二人の恋愛感情が高まった時に財布の盗難という事件が起き、259 ページからは愛する人を疑わなければならないイポリットの苦悩が描かれている (第 4 段階)。このような段階を経て最後の第 5 段階で彼らは結ばれるのである。そしてこのような恋愛のパターンは現代の小説や映画などでもみることができ最も典型的なパターンである。なぜなら恋愛感情が高まるにつれて相手に対する執着が強まり、それはやがて嫉妬、または相手が自分を裏切っているのではないかという不信感に変わるからである。このように最も一般的な恋愛の法則を描いた『財布』は恋愛によってもたらされる心理の変化を描いたものでもある。バルザックはこの作品を通してど

のような恋愛論を展開したかったのだろうか？

この問いに答えるにはまず『財布』において恋愛のどの段階が最も強調されているかをみる必要がある。この作品の題名が『財布』であることから理解できるように、作者が重点を置いている場面は財布を盗まれたと考えるイポリットがアデライドを疑いながらも彼女を信じようと苦悩する第4段階である。テキストにはこうしたイポリットの心理を的確に表している表現がある。

Il aimait Mlle de Rouville si passionnément que, malgré le vol de la bourse, il l'adorait encore. 1)

この文章からは恋愛が社会的正義や犯罪を超えたものであり、恋人が不正を行ったからといって恋愛感情が衰えるのではないということが述べられている。それに続く次の文章でバルザックは悪女としてフランス文学史上名高いマノン・レスコーを例に不正を行う女性に対してその恋人である男性が抱く感情を述べている。

Son amour était celui du chevalier des Grioux admirant et purifiant sa maîtresse jusque sur la charrette qui mène en prison les femmes perdues. « Pourquoi mon amour ne la rendrait-il pas la plus pure de toutes les femmes? Pourquoi l'abandonner au mal et au vice, sans lui tendre une main amie? » 2)

ここにある『デ・グリュウ騎士とマノン・レスコーの物語』(*Histoire du chevalier des Grioux et de Manon Lescaut*, 1731) はアベ・プレヴォーの (Abbé Prévost, 1697-1763) 『隠遁したある貴族の回想と冒険』(*Mémoires et aventures d'un homme de qualité que s'est retiré du monde*, 1728-31) に収録されている作品である。バルザックがいつているように、イポリットはたとえアデライドがマノンのように不実な恋人であっても、または盗みの犯人であっても彼女を愛し、彼女をより正しい道へと導きたいとさえ考えている。

Rien ne séduit plus un jeune homme que de jouer le rôle d'un bon génie auprès d'une femme [...] N'y a-t-il pas quelques grandeurs à savoir que l'on aime assez pour aimer encore là où l'amour des autres s'éteint et meurt? 3)

バルザックが本文でこのような考えを述べるのは彼自身が女性全般に対して一種の不信感を抱いていたからではないだろうか。その不信感とは『結婚の生理学』(*Physiologie*

du mariage, 1829) にある「もっとも操正しい女でも、その内部に断じて純潔ならざる何物かを抱いている。4)」という短い文にもよく表れている。作者は主人公イポリットに一目非の打ち所のない理想的なアデライドにも何かしら秘密があるのだという警鐘をあらかじめ鳴らしているのではないだろうか。だからこそバルザックは物語の初めからアデライドと彼女の母親、およびその周辺人物を常に謎めいたものとして登場させ、読者もこのような登場人物を容易に信頼しないように仕組んでいるのである。登場人物の正体を曖昧にし、謎めいたものとするというバルザックの手法は彼の他の作品にもみることができる。例えば、『金色の眼の乙女』(La Fille aux yeux d'or, 1835) ではパキータという謎の少女に惹かれる主人公マルセーなどが挙げられる。これらのことをまとめてみると、『財布』が表す恋愛がもたらす最も重要な感情は疑いや不信の気持ちであり、この疑いは相手が謎めいていれば謎めいているほどかきたてられる。そして疑いという感情を乗り越えることによって人は再び強い絆で結ばれるということがいえる。

『財布』は恋愛に関する様々な教訓を読者に教えてくれる。この作品を読んだ後、バルザックが恋愛に重要な意味を与えているのは恋愛が自分の外にあるものを探求する手段となるからである考えるようになった。それは芸術家が美や永遠を追求するのと同じように私たちもそうしたものを追い求めてしまうからではないだろうか。『財布』はミステリー作品のように、無意識のうちに読者を作者の考えへと導く作品である。だからこそ物語の最後でアデライドの無実が証明されると読者である私たちはイポリットと同じように安堵感を覚えるのである。

#### 注

- 1) Balzac, *La maison du chat-qui-pelote suivi de Le Bal de Sceaux ; La Vendetta ; La Bourse*, Paris, GF-Flammarion, 1985, p.258.
- 2) Ibid., p.258.
- 3) Ibid., p.259.
- 4) バルザック『バルザック全集第二巻 - 結婚の生理学』、安土正夫、吉田幸男訳、東京創元社、1973年、45頁。

#### 参考文献

- 福井芳男他編『フランス文学講座』、第1巻『小説Ⅰ』、大修館書店、1978年。  
福井芳男他編『フランス文学講座』、第2巻『小説Ⅱ』、大修館書店、1978年。